

経済格差、貧困、労働、流通……。

中学生たちに、世界がかかえるさまざまな問題を、自分たちにもかわりがあるものとして、どのように伝えればよいか。フェアトレードは、その格好の教材だ。

### コーヒーをめぐる豊かな文化と南北問題

コーヒーをめぐる豊かな文化や、グローバル化する経済がもたらす問題に気づき、その解決方法のひとつとしてフェアトレードを取り上げる。そんな授業を「コーヒーモノガタリ」と題して五時間で展開した。今年度から中学校の新学習指導要領が全面実施となり、それまで、二つまたは三つの国を事例としていた世界地理も、全地域（アフリカ州を含む六州）を教えることになった。ここでは、羅列的な知識の習得ではなく、主題を設けて、各州の地域的特色を理解させることが求められており、中学一年生を対象としたアフリカ州の学習において、この授業をのびのび実践することができた。

授業の導入は、コーヒー生豆や殻や葉、コーヒーセラモニーの道具など実物を用いたクイズで、コーヒーをめぐる豊かな文化が、エチオピアの人びとの日常のなかにあることを知る。また、生産工程の写真の並び替えから、たくさんの人たちの手を経てわ

たしたちのところにはコーヒーが届いていることを想像できる。次に、コーヒー生産国と輸入国の分布図から、南北問題やモノカルチャー経済について学習する。そこで、コーヒー一杯の価格のうち、生産者の取り分が極めて少ないことを知ったとき、「そんなん暮らせへんやん！」と多くのクラスで声があがった。ただでさえ低いその価格は、激しく変動する国際価格を基準に決められていること、そして生徒たちの驚きの声にこたえ、別の価格の決め方があることを紹介し、フェアトレードの存在を知ることとなる。

### フェアトレードコーヒーを育てる村を訪ねよう

フェアトレードコーヒーを知った後は、タンザニア・キリマンジャロ山の西斜面にあるルカニ村をめぐるワークをおこなう。この村は、コーヒーの国際価格が史上最低となった二〇〇一年の「コーヒー危機」のあと、辻村英之氏（京都大学）が中

心となつてフェアトレードを始めた村だ。フェアトレードの現場を見たくて、二〇〇九年夏にこの村に滞在した時に撮影した写真をワークに用いる。生徒たちは九つのグループにわかれ、机に置いてある三枚の写真に共通するテーマや気づいたことについて話し合い、ワークシートに記入する。数分後にはグループで次の机へ移動し、異なるテーマの三枚の写真を読み取り、これを繰り返し九つのテーマで村をめぐる。大人向けのワークショップでは、ひとつのテーマをじっくり読み取り、他のグループで紹介する方法が効果的だが、生徒たちには、キャプションを貼った複数の写真を、自分で見て歩く方がやっぱり楽しい。

生徒たちの感想は、村の衛生面や教育面の遅れを指摘しながら、「一度行ってみたい」「最低限の生活はできそう」「自分たちの当たり前の生活が当たり前でないことを知った」「自分なら絶対に暮らせない」などさまざまだが、フェアトレードが必要な背景は共通して感じ取ったと思う。フェアトレード奨励金で建てた図書館や中学校については、良かったという生徒が大半だが、「建物だけじゃだめだ」と指摘する生徒もいた。そして、誰もが共通して評価していたのは森の豊かさだ。コーヒーは、バナナや林の木で日陰をつくって栽培され、同じ畑で芋類や豆類など自給用にもなる作物を混作している。また、家畜の糞を堆肥にする循環型農業は環境保全にもなる。子どもたちの笑顔や、村人が工夫して助け合っ

てくらししていることに注目している生徒も多かった。一方、「フェアトレードを実践する村でもこの様子なら、他の村はどうなのか」という疑問など、フェア

トレードの限界や、その拡大の必要性を感じた生徒もいた。

### フェアトレードを他の誰かに伝えよう

「村めぐり」の後は、ルカニ村のコーヒーを伝えるポップを作成した。ポップには、このコーヒーを消費者に買ってもらうために、何をアピールしたらいいかを考えて、キャッチコピーやイラストで表現する。フェアトレードが生産者のくらしや環境を守ることにつながるなど、その意味を自分なりに理解していなければできない。学んだことを、他の誰かに伝えることが、問題解決のための社会参加への小さな一歩になると考えて、この授業のまとめのワークとした。

またクラブ活動では、京都YWCAのバザーと学校のクリスマス礼拝で、フェアトレードショップを開き、チョコレートなどの食品や、アジアやアフリカの雑貨などを販売している。さらに、フェアトレードは、途上国（南）の生産者だけを対象にしているわけではないという考えから、京都の紫野障害者授産所や、修光学園などのクッキー類も販売する。こうした施設に訪問してお話を聞いたときには、先進国（北）にも同様にフェア（公正）でないことがあると気づかされる。

フェアトレードを学ぶことで、身近にあるモノの生産者に思いをはせ、消費者としてのフェアを考え行動に移すこと、さらに、フェアトレードを越えて、日常のなかにあるさまざまな不公正なことに気づく目を養い、公正な社会を築く行動につながればと思う。



フェアトレードコーヒーを伝えるポップをつくらう（生徒作品）



京都YWCAバザーで販売したフェアトレード商品



ルカニ村を写真でめぐるワーク



フェアトレード・プレミアムで建設中のルカニ村中学校での授業の様子



教材本『コーヒーモノガタリ』表紙



コーヒーセラモニー（エチオピア）



タンザニア・ルカニ村の「家庭畑」で育つコーヒーの木（バナナや林の木で日陰をつくる）